

「ふるさとまちづくり考」

山口 眞司

私はものをつくり、表現することに幼少の頃から興味を持ち、大学は建築家をめざし入学しました。大学三年生の頃から身体で表現する演劇に傾倒し、俳優をこころざし「演劇集団 円」の研究所に入所しました。四年後には劇団員に昇格、俳優として舞台を中心に活動し現在に至ります。

父が市議会議員を三期十二年務め、そのあとを妻が継いで議員活動をしています。そのような状況もあり、私自身もPTA等の地域活動や選挙運動、妻の議員活動のサポートを通じて、広くまちの政治を体感するようになりました。

私のまちは首都圏四〇キロ圏内に位置する人口六万三千人余の、埼玉県にある田園都市です。四十年前前に人口三万人で特例の市になり、二十年をかけて人口が倍増しました。その後はほぼ横ばいで現在に至ります。ご多聞にもれず、高齢化は進み税収は減り、年々予算規

模は縮小傾向にあります。米や梨を作る農家も高齢化し、農業で生計を立てることは難しくなり、「埼玉都民」と言われた働き手も定年退職を迎えるひとが増加し、人口は減少傾向に入りました。

戦後、日本は子ども達にひもじい思いはさせない、良い教育を受けさせたい、欧米に追いつき追い越せと価値を一つにして経済発展をとげてきました。おかげで私達のくらしは豊かになり、ものに不自由することなく生活できるようになりました。しかし今、経済は低迷し政治は混沌としています。経済も政治も「しあわせ」に暮らすための手段であるはずが、それ自体が目的化されてしまい、お金本位の価値観が「目にみえない大切なもの」を失わせてしまったのではないだろうか。個人主義を履き違えた、自分さえよければ良いという考え方が横行し、昔から日本人が培ってきた人と人との絆は失われつつあります。

これから先の未来はどうなるのか？ 日本の抱える問題は、まさに私達のまちの問題とあわせ鏡のように重なっていることを実感します。

時代の転換点といわれる今、ほころびが見える組織や制度のしくみは見直して、新しい角度、発想でまちづくり、ひとづくりをしなければならぬと強く思う日々です。

この先の国のかたち、まちのかたちを考える上で避けて通れない人口減少問題、少子高齢化問題、新しい産業形態の確立。

このような状況の中での地方分権、地域主権。権限も財源も移譲されれば、ますます基礎自治体は受け身の自治ではなく能動的な自治、共同体としての自己決定力が求められることとなります。これからは「新しい公共」の考えを土台に中期を見据えた、まちのビジョンをつくり、まちの特性を生かした個性あるまちづくり「オンリーワンのまちづくり」を住民と共に進めなければならぬと思います。

そのためには「自分達のまちは自分達でつくる」という意識を育んでいくこと。情報を共有し、コンセンサスをはかること。まち全体が同じ方向を向いてまちをつくるということが大切なことだと考えます。

そして、このことを実践するためには一人ひとりのマインド、精神性を高めることが不可欠なことだと思えます。まさに「まちづくりはひとづくり、ひとづくりはまちづくり」と考えます。市民が共有する宗教観、哲学、相互扶助の精神や支え合いが必要です。幼いころからまち全体で「その思い」を育み、ひとがひとを支えることによって、経済効率を高め、まちに対する愛着を生み、つながりのある、しあわせを実感できる「ふるさと」と

呼べるまちがつけられるのだと思います。

自然を理解し、ひとのいとなみは自然の恵みと共にあるのだということをもう一度再認識する。「ひとは独りで生まれて独りで死んでゆく。でも独りでは生きてゆけない。だからこそ相手のことをおもいやり、考え、交わる」「ひとを守ってこそ自分を守る」——ひとの生き方がまちのかたちをつくるのだと思います。

私のまちは電車で都心まで約四十分、高速道路のスマートICもできます。この都市の利便性があつて、なおかつ自然がたくさん残っている。私はこのミスマッチ感覚を逆手にとり他の自治体と差別化することによって、個性あるまちづくりをめざす「アーバン・ロハス」の発想でまちをブランド化したいと考えています。

また、未来を担う子ども達はまちの宝なんだという思いをまち全体で共有し、保育園、幼稚園、学校と家庭と地域が一体となった子育てをする。そして市民一人ひとりは生涯学習社会を標榜し自己実現をめざす。魅力あるひとづくりが魅力あるまちづくりに結実する。子ども達に自分のふるさとと呼べるまちづくりをめざしたい。

「明るく、元気で、誇れるまちに」——これが私の思う、ふるさとのまちづくり考です。